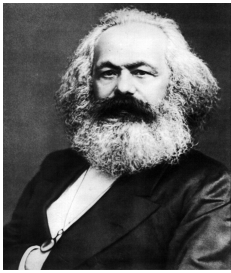
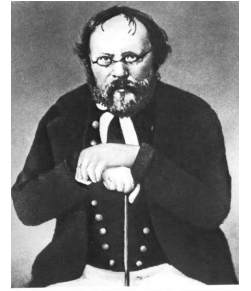


カール・マルクス『哲学の貧困』（1847年）

担当者：森田俊吾（mshungo@gmail.com）



プルードン著『経済的矛盾の体系あるいは貧困の哲学』に対する批判として書かれたマルクスの『哲学の貧困』（1847年執筆）は、その前後に位置する『ドイツ・イデオロギー』や『共産党宣言』に比べて、いささか華々しさに欠けた地味な存在にみえるかもしれない。だが、『経済学批判』の「序言」において、マルクスは次のように述べている。「われわれの見解の決定的な諸論点は、1847年に刊行されたプルードンに反対した私の著書『哲学の貧困』のなかで、たんに論争のかたちではあったが、はじめて科学的に示された。」¹



A マルクス／プルードン年表

年号	マルクス (1818-1883)	プルードン (1809-1865)
1809年		プルードン生
1814年 ウィーン会議		
1818年	マルクス生	祖父の農場で働く
1828年		印刷所の校正工になる。ヘブライ語を修得
1830年 七月革命		
1831年	ヘーゲル没	リヨン反乱
1840年	フリードリヒ・ヴィルヘルム4世プロイセン王に即位	『所有とは何か』
1841年	大学を卒業	『ブランキへの手紙』
1843年	『ユダヤ人問題によせて』、『ヘーゲル法哲学批判序説』	『人類における秩序の創造について』
1844年	『独仏年誌』創刊	マルクス、グリュン、バクーニンなどと付き合う
1845年	『聖家族』、パリ追放	『鉄道と海運の競争について』
1846年	前年度より『ドイツ・イデオロギー』を共同執筆	『貧困の哲学』
1847年	『哲学の貧困』	ボードレールと出会う ²
1848年 二月革命		
1848年	『共産党宣言』	国会議員に選出
1849年	『賃労働と資本』、ロンドンへ亡命	ナポレオン三世侮辱の罪により投獄（～52年）
1850年	『フランスにおける階級闘争』	『人民』廃刊により記者廃業
1851年	『ニューヨーク・トリビューン』のロンドン通信員になる	『19世紀における革命の一般的理念』
1852年	『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』	『12月2日のクーデターによって証明された社会革命』
1853年		『進歩の哲学』
1857年	『57-58年草稿』	『ボヴァリー夫人』と『悪の華』裁判
1858年		『革命と教会における正義』、ブリュッセルに亡命
1859年	『経済学批判』第一分冊刊行	イタリア統一戦争
1861年	『61-63年草稿』	『戦争と平和—国際公法の原理と構造』
1862年		パリに戻る
1863年	『資本論』第1部執筆	『連合の原理および革命派再建の必要について』
1864年	第一インターナショナル結成	『労働者階級の政治的能力』を準備
1865年		プルードン没
1867年	『資本論』第1巻	
1870-71年 普仏戦争—パリ・コミュン		
1883年	マルクス没	

¹山本雄一郎『史的唯物論と経済的カテゴリー論—マルクス『哲学の貧困』の意義について—』、神戸商科大学経済研究所、1992年、1頁。

²「われわれは新=ヴィヴィエンヌ街に出来たばかりの小さな料理屋に行きました。プルードンは大いにしゃべりました、激しく、たっぷりと、そして、彼の見知らぬこの私に、彼の計画や企てを打ち明け、言うならば無意志的に、沢山の洒落を連発したのです。この論客は法外によく食べ、ほとんど飲まないのに私は気がつきましたが、私の少食と渇きのほどは、彼の食欲と対照をなすものでした。「文学者〔知的労働者と書こうとした痕跡がある—引用者注〕にしては、と私は彼に言いました、驚くほど召し上りますね。」「なすべき大きな事があるからです」と彼は私に答えました。きわめてあっさりと言ったので、真面目に話しているのか、おどけて見せたのか、察することもできませんでした。[...] 食事がすんで、私が鈴を鳴してボーイを呼び二人の共通の出費を支払おうとすると、プルードンがたいそう強く私の意図に反対したので、私も彼が財布を取り出すにまかせましたが、私の少しおどろいたことに、彼は厳密に自分の夕食分しか払いませんでした。——事によるとそこからあなたは、平等に対する断乎たる嗜好と、権利への誇張された愛とを結論されるでしょうか？」（『ボードレール全集 VI』、阿部良雄訳、筑摩書房、1993年、543頁。）

B 『哲学の貧困』発表の経緯

『哲学の貧困』以前のプルードン評価 マルクスは『聖家族』でバウアーの解釈による「批判的プルードン」に対して「真の大衆的プルードン」を対置しながらプルードンについて論じた。『聖家族』の主題は青年ヘーゲル派の観念的歪曲を批判することにあり、プルードンはいわばそのケース・スタディであった。「大衆的プルードン」は所有批判を経済学批判に結びつけることによって「経済学を革命し、真の経済科学をはじめて可能にした」というのがその評価である。プルードンの経済学批判は「経済学の前提にとらわれている」点に限界があると指摘しながらも、この時点でのマルクスはプルードンにきわめて高い評価を与えた。そしてマルクスは、経済学の前提にとらわれない経済学批判、すなわち経済学のカテゴリーを私的所有の現われととらえ、「疎外された労働」の概念によって批判する批判を自らの課題とし、プルードンにもそれを期待したのだった。

マルクスは1844年10月から翌年2月にかけてパリでプルードンに会い、ヘーゲル弁証法、おそらくはフォイエルバッハ的に改作されたヘーゲル弁証法を講じた³。プルードンがこの講義から刺激を得たことは、『経済的諸矛盾の体系』の執筆ノートから窺える。

『哲学の貧困』のプルードン批判 マルクスは『貧困の哲学』が出版された後、本を入手したエンゲルス⁴に書き抜きを送ってもらう⁵。同年12月にはアンネンコフ宛への手紙で、プルードンを徹底的に批判している⁶。その批判を元に1947年7月に『哲学の貧困』が出版された。この本は、プルードンの価値論を批判する「科学上の一発見」という章と彼の弁証法を批判する「経済学の形而上学」の2章からなる。第1章ではプルードンの価値論、すなわち新しい所有関係のもとで需給の均衡が成立すれば、賃金＝生産費のみからなる「構成された価値」が成立するという。価値論は、リカード価値論の焼き直し、その「ユートピア的解釈」にすぎないとし、リカードが「ブルジョア社会の理論として科学的に説いた」ものを「未来の革命的理論」とみなしているだけだ、と批判する。『共産党宣言』でプルードンをブルジョアの社会主義に分類するのはこの点にもとづいている。さらにマルクスは市場と商品は欲するが貨幣と資本は欲しないプルードンの理論的不徹底を攻撃する。

第2章は、プルードンの弁証法がヘーゲル弁証法の焼き直し、それも誤解に満ちた改作にすぎないと罵倒する。プルードンは概念の論理的展開と現実の歴史的展開を混同していること、事物を「良い面」と「悪い面」に分けて歴史は「良い面」によって進むと考え、問題の解決を「悪い面を除去して良い面を保存すること」に求めているが、これは弁証法とは無縁であること、プルードンはいかに弁証法的総合に到達できず、定立と反定立のあいだをうろついたにすぎない、というのがその主な内容である。ただし、『貧困の哲学』では、プルードンは「悪い面」の積極的役割を認めており、この二面の対立の持続を強調している。したがってプルードンの弁証法は矛盾の耐えざる存在を認めることで、矛盾の最終的解決を信じないところに最大の特徴がある。

『哲学の貧困』以後のプルードン評価 プルードンへの激しい攻撃によって、その後の交流も一切絶たれていたが、マルクスは、プルードンの動向を無視していたわけではなかった⁷。また、プルードンの価値論を批判するために援用したリカードの理論にも後年、批判を加え⁸、後の『資本論』へと結実する。その『資本論』のフランス語版が出版される際、マルクスは「ブルー

³ただし、これより前にヘーゲルを学んでいる形跡があることをフランスの社会学者ジョルジュ・ギュルヴィッチ（1894 - 1965）が指摘している。ギュルヴィッチによれば、プルードンは、ハイน์リヒ・アーレンス（1808 - 1874）のコレージュ・ド・フランス講義（1834 - 1842）によって、ヘーゲルの弁証法を学んだとされる（Georges Gurvitch, *Proudhon. Sa vie, son œuvre, avec un exposé de sa philosophie*, PUF, 1965, p.17.）。アーレンスは、フィヒテやシュリングに学んだ哲学者フリードリヒ・クラウゼの弟子。また齊藤悦則は、のちのプルードンの重要な方法論的概念の一つとなる「イデオ＝レアリズム」が、このアーレンスの用語であったことを指摘している（ピエール・アンサール『プルードンの社会学』、齊藤悦則訳、法政大学出版、1981年、275頁。）。木村周市朗によれば、アーレンスは多元的・有機的社会観のもとで、人々の生活諸関係という現実の客観世界を人間の自然（自然法）の見地から分析する「生活目的」論の観点から、「人格」や才能の開展を阻む障害物、とりわけ「所有」の不平等への批判を展開し、またその改善のための方法として、分節的社会を構成する各種の自主的な「アソツィアツィオン」を構想したという（木村周市朗「近代原理の形式性とドイツ国家学の実質性」、『成城大学経済研究』、成城大学、2010年、38-39頁。）

⁴1846年10月23日、エンゲルスからマルクスへの手紙より。「プルードンの著書を君たちは広告で見たことと思う。僕は近いうちにそれをもたらさると思う。それは15フランだ。買うわけにはいかない。高すぎる。」（マルクス＝エンゲルス『資本論書簡 第1巻』、岡崎次郎訳、大月書店、1999年、52頁。）

⁵1846年12月、エンゲルスからマルクスへの手紙より。「...君たちのところにプルードンの著書があるかどうか、知らせてくれたまえ。ろくでもない本だが、プルードンの本をもし君の著書のために利用したいと思うなら、僕のつくった非常に詳しい書き抜きを送ってあげよう。この本は15フランというその値段には値しないのだ。」（同上、52頁。）

⁶1846年12月28日、マルクスからアンネンコフへの手紙より。「あからさまに言えば、この本は総体によくはない、いや、じつによくはない、と思います。プルードン氏がこの不細工であつかましい著作のなかで誇示している「ドイツ哲学の一端について」は、あなたもお手紙のなかで笑っておられますが、しかし、経済学的な展開は哲学の毒に侵されてはいない、としておられます。[...] プルードン氏は、おかしな哲学をもっているので経済学の誤った批判を与えるのではなく、彼がほかの多くのものと同様にフリーエから借りている言葉で言えば、現在の社会状態をその組み合わせにおいて理解していないので、おかしな哲学を与えるのです。」（同上 53頁。）

⁷1851年8月10日頃、エンゲルスからマルクスへの手紙より。プルードンの件だが、この男でも進歩はするらしい。彼のたわごとが展開されて行く諸段階は、とにもかくにもがまんできる形をとっている。そして、ルイ・ブランもこういう「異端」には歯がたたないかもしれない。結局いまプルードン氏がたどり着くところも、所有権の真の意味は、多かれ少なかれ変装した国家によるいっさいの所有の変装した没収にある、ということ、そして、国家の廃止の真の意味は、国家集権の強化だ、ということなのだ。（同上、108頁。）

⁸1869年11月26日、マルクスからエンゲルスへの手紙より。「プルードンに反対した僕の本のなかでは僕はまだまだたくりカードの地代論を受け入れてい

ドンによって理想化された小ブルジョア主義」に陥ったフランス人を「解放する」ことを望んでいた⁹。

C 『哲学の貧困』・『貧困の哲学』、両著作の目次比較

マルクス『哲学の貧困』：目次

第1章 科学上の発見

- 第1節 使用価値と交換価値との対立
- 第2節 構成された価値または総合価値
- 第3節 価値均衡法則の適用
 - イ 貨幣
 - ロ 労働の剰余

第2章 経済学の形而上学

- 第1節 方法
- 第2節 分業と機械
- 第3節 競争と独占
- 第4節 土地所有または地代
- 第5節 ストライキと労働者の団結

ブルドン『貧困の哲学』：目次

- 第1章 経済科学について
- 第2章 価値について
- 第3章 経済発展の第1段階—分業
- 第4章 第2段階—機械
- 第5章 第3段階—競争
- 第6章 第4段階—独占
- 第7章 第5段階—警察あるいは税金
- 第8章 矛盾の法則のもとでの人間の責任と神の責任—神の摂理の問題の解決
- 第9章 第6段階—貿易のバランス
- 第10章 第7段階—信用
- 第11章 第8段階—所有
- 第12章 第9段階—共有
- 第13章 第10段階—人口
- 第14章 要約と結論

D マルクス自用訂正書き入れ本『哲学の貧困』（東北大学・櫛田文庫所蔵）の「発見」について

1950年（昭和25年）ごろ、マルクス自身が書き入れた『哲学の貧困』が東北大学附属図書館の「櫛田民蔵文庫」から偶然発見された。発見した田中菊次によれば、マルクスの自用本は、まず彼の没後、二人の娘ラウラ・ラファルグとエレアノール・アヴェリングによってドイツ社会民主党に寄贈され、同党文庫の所蔵となった。そして1921年7月27日に、ドイツ社会民主党より櫛田の手に渡る。櫛田が亡くなった翌年、1935年に東北帝国大学が蔵書を一括購入する。戦時中、官憲による左翼文献廃棄の要求から、倉庫に隠匿していた為、その存在は明るみに出なかったとのことである。以上の「発見」は、宇佐美誠次によれば、櫛田が存命時は櫛田周辺を含めよく知られていた事実であり、発見でも何でもないとしている。しかし、発見後、田中が来仙中の宇野弘蔵に会った際にこのことを話すと、宇野は「こんな本が櫛田文庫にあったのか」と驚き、東京に戻ってから各方面にこの話をしていたらしい。そのしばらく後に、情報を聞きつけた山村喬が櫛田文庫から同大学教授の末永茂喜を経由して『哲学の貧困』を数日間借りだしたという。翌年に発表された山村の論文「〈哲学の貧困〉のマルクスによる訂正について」は国際的に注目されることになった。宇佐美は山村が1949年に翻訳した岩波版『哲学の貧困』作成のために、東北大学附属図書館所蔵の同書を閲覧し、岩波書店の援助をえて書き入れ部分の写真もとったと主張しているが、田中によればそれは誤りである。（田中菊次『マルクス経済学の学問的達成と未成』、創風社、1989年。）

たが、そのなかでもすでにリカードの立場から見てもまちがっている点を論述した。」（マルクス＝エンゲルス『資本論書簡 第2巻』、岡崎次郎訳、大月書店、1999年、206頁。）

⁹マルクスからルートヴィヒ・ビューヒナーへの手紙より。「私がきわめて重要なことと考えていることは、フランス人たちがブルドンによって理想化された小ブルジョア主義のために陥れられているそのまちがった考え方から彼らを解放することなのです。」（同上、33頁。）

カール・マルクス『哲学の貧困』

引用箇所はマルクスが『哲学の貧困』、『マルクス＝エンゲルス全集 第4巻』所収、平田清明訳、大月書店、1960年から、ブルードンが『貧困の哲学 上・下』、斉藤悦則訳、平凡社、2014年から。〔 〕内はドイツ語版による改訂、〈 〉内は引用者による原文対応。

§1 科学上の発見

§1.1 使用価値と交換価値との対立

要約

マルクスはまずブルードンが「交換」について語る時、前提となる分業に基づく生産について触れていないため、なぜ交換が行われ発展したのかという問題が未解決であることを指摘する。次に経済学者が価値の二重性を提示したが、その矛盾的性格を明らかにしてこなかったというブルードンの主張に対し、マルクスはシスモンディやローダゲールをあげて反論する。ブルードンは、使用＝効用価値と交換＝所見価値の対立・矛盾から、供給と需要の対立関係を見出すが、現実の社会では、供給者が需要者に、需要者が供給者となる以上、この対立関係は「儀礼形式」にしかならない。

● 価値の二重性

ブルードン じっさい、価値には二つの面がある。ひとつは経済学者が使用価値 [la valeur d'utilité] と呼ぶもので、これはものそれ自身の価値である。もうひとつは交換価値 (la valeur en échange) で、これはひとの見かたによる価値 (la valeur d'opinion (所見価値)) である (95)。自然の産物 (les produits naturels) であれ人間のいとなみの産物 (les produits industriels) であれ、その生産物が人間の暮らしに役立つとき、そういう能力は使用価値と呼ばれる。生産物がそれぞれべつべつの生産物にひきかえられるとき、そういう能力は交換価値と呼ばれる。じつは、この二つは根本において同じものである。なぜなら、交換価値は使用価値に置換という観念を付け加えたものにすぎない (97-98)。

マルクス ブルードン氏の仮定におけるこの産業活動 (l'industrie) というものは、どのようなものであるのか？その起源はどのようなものであるのか？きわめて多くのものに欲望 (le besoin) を感じている人も、たった一人では、「そう多くのものに手をだすことはできない」 (62)。ところで、諸君がまさに、生産に力のかす多くの人手を前提した瞬間に、諸君はすでに、分業 (la division du travail) にもとづく生産全体を前提しているのである。だから、ブルードン氏が前提しているような欲望は、それ自体が、分業全体を前提しているのである。分業を前提するからには交換が存在することになり、したがってまた交換価値が存在することになる。そうならば、はじめから交換価値を前提しても、同じことだったのであろう (63)。

マルクスにおける分業について 分業を「分業一般」としてとらえるブルードンに対し、マルクスは、『哲学の貧困』に先立って、社会的分業の史的展開を明らかにした『ドイツ・イデオロギー』での理解をふまえて、分業を「社会的分業」を「工場内分業」として理論的に区別し、「近代的工場の内部では、企業家の権威によって分業がこまかく規定されているのに反して、近代社会には、労働の配分について自由競争以外のなんらの規則も権威もない」ことを明らかにするのである。この分業の区別は、『資本論』第1部第12章「分業とマニファクチュア」での展開につながる。

● 交換の歴史の三段階

ブルードン 私が必要とするものの大半は、自然にはわずかしかが存在しない。あるいはまったく存在しない。したがって、私は自分に欠けているものが生産されるよう、自分のちからも加えねばならない。しかし、あれもこれもというわけにはいかないのだから、さまざまのしごとをしているほかのひとびとに協力を呼びかける。それぞれの生産物の一部分を出しあい、交換しあおうと提案する。私が自分の手元にもつ自分の生産物は、自分で消費する分をかならず上回っているはずだ。そして、相手もそれぞれ自分で消費する分以上のものをもっているはずだ。こうした暗黙の合意によって交易 (la

commerce) がおこなわれる。[...] じっさい、人間は自然の財 (les biens naturels) (原初的共有財産と呼ばれるもの) をめぐって何前年ものあいだ争いを続けたあげく、自分たちのいとなみとして交換というものを発生させたのである (97)。

マルクス 交換はそれ独特の歴史をもっている。交換はさまざまな局面を経過してきた。中世におけるように、余分のものだけが、つまり、消費にたいする生産の超過分だけが、交換されていた時代があった。たんに余分のものだけではなくて、すべての生産物が、すべての産業的存在が、取引されるようになっていた時代、生産全体が交換に依存していた時代もあった。[...] 最後に、譲渡できないものと人々の見なしていたものがすべて、交換の、取引の対象となって、譲渡されうる時代がやってきた。[...] すべてのものが腐敗し、あらゆるものが金で買われる時代、経済学の用語でいいかえてみれば、精神的なものであれ物質的なものであれ、すべてのものが売買価値になっているがために、市場にもっていかれてそこでそれぞれのいちばん正当な価値で評価される時代、これがその最後の時代なのである (64-65)。

- 使用価値と交換価値の関係、シスモンディとローダゲールから

ブルードン 経済学者は、価値の二重性をみごとに浮き彫りにしてくれたが、価値の矛盾した本性についてはそれほどではない。[...] 商品は量が増えると、交換で分が悪くなり、商業的な価値が下がっていく。このことから、労働の必要性和その成果とのあいだには矛盾があると言えるのではないか (100)。使用価値と交換価値のあいだの、こうした驚くほどの対照は、これまでほとんど指摘されてこなかった。[...] どうして価値は生産が増大するにつれて下落するのか。また逆に、生産が下降すると、どうして価値は上昇するのか。専門の用語で言えば、使用価値と交換価値は互いに相手を必要としながら、互いに反比例する (102)。

マルクス シスモンディは、使用価値と交換価値とのあいだの対立に彼の主要学説の基礎をおいた。そして、この学説によれば、所得の現象は、生産の増大に比例するのである。ローダゲールは、二種類の価値の反比例にその体系の基礎をおいた。そして、リカードの時代には、彼〔ローダゲール〕の学説はきわめて広く普及していたのであって、そのために、後者〔リカード〕は、一般に知れわたったことについて語るのと同じように、この学説について語ることができたのであった (66)。

- 使用価値 = 豊富さ = 供給 / 交換価値 = 稀少さ = 需要

ブルードン すなわち、有用で絶対に必要なものでも量が無限に存在するものはタダで、何の役にも立たないのに量が極端に少ないものははかり知れないほど高価になる。しかし、むしろ面倒なことに、現実はいくらほど極端なことにはならない。第一、人間が生産するものはけっして量が無限大にはならない。それに、本当に何の役にも立たないものなら何の価値もないだろうから、どれほど希少なものでも何ほどかの有用性がなければならない。したがって、使用価値と交換価値は、本性としてたえず反発しあうけれども、宿命的に結びついて、離れることがない。[...] 人間には生産物の多様性にたいする欲求と、その供給を自分の労働によっておこなわねばならない義務とが同時に存在するから、使用価値と交換価値の対立が必然的に生じるのである (102-103)。あなたが買い手であれば、私の生産物はあなたの気に入るものでなければならない。あなたが売り手なら、あなたの生産物が私の気に入るものでなければならない。[...] そうしたお互いの自由がなければ、交換はもはや産業における連帯のいとなみではなくなり、略奪と化す。ついでに言うておくと、共產主義ではけっしてこの問題を克服できない (104)。すでに見たように、使用価値と交換価値の対立をもたらしただのも、まさしく人間の自由な意志であった。どうすれば自由意志を存続させながら、この対立を解消させることができるのだろうか (105)。

マルクス プルードン氏を困惑の極に追いやるものは、なんであるか？それはただ、彼が需要を忘れはてていた、ということではない。一つの物はそれにたいする需要があるかぎりにおいてのみ、稀少であったり豊富であったりしうのだ、ということである。[...] 交換価値と稀少さとを、使用価値と豊富さとを、等式においたのちに、プルードン氏は、稀少さと交換価値とのなかに使用価値を見いだすことも、豊富さと使用価値とのなかに交換価値を見いだすこともできないので、びっくり仰天する (68)。そうしておいたのちに、プルードン氏は、使用価値と供給とを同一視し、交換価値と需要とを同一視する (69)。供給だけが効用を代表するものでもなく、需要だけが所見 (opinion) を代表するものでもない。[...] 需要は同時に一つの供給であり、供給は同時に一つの需要である (70)。プルードン氏の全弁証法は、なにに存するのか？

使用価値と交換価値、供給と需要、これらのものをば、稀少さと豊富さ、効用〈utile〉と所見〈opinion〉、両者とも自由意志の騎士である一人の生産者と一人の消費者、といったような抽象的な相互に矛盾する概念をもって、おきかえることに存するのである (73)。

『哲学の貧困』におけるリカードの位置 「プルードンの経済理論を批判するマルクスは、リカードの価値論、賃金論、地代論、等を全面的に援用した。しかし、マルクスによるリカードの全面的援用のうちには、プルードンからリカードを単に擁護するばかりでなく、スミス→リカード経済学の積極的意義をおし出すことによって同時に、リカードをどのようにのりこえるべきか、という問題提起が含まれている。リカードは、商品の価値と労働（労働力）の価値を事実上区別して、資本蓄積の源泉としての、『労働商品』を冷酷に語った。帽子の制作費と人間の維持費を同一視して、「おそるべき現実性である商品たる労働」を、ブルジョア的富の生産のために、積極的に承認した。リカード理論は、労働者の疎外過程に根をおろし、そのなかに満足を見いだすところの、ブルジョア的实践に照応する。」（森川喜美雄『プルードンとマルクス』、未来社、1979年、187-189頁。）

§1.2 構成された価値または総合価値

要約

使用価値と交換価値が止揚されると、社会的富の総体である「構成された価値〈la valeur constituée〉」が登場する。プルードンは「構成された価値」は、労働によって生産された物同士の比例関係として理解されるものであるとし、さらにこれをスミスやセーなどが見落としてきた自らの発見であると自負するが、マルクスはそれに対し「商品の相対的価値は生産に要した労働量によって決まる」というリカードの学説を提示する。次に、構成された価値からプルードンが引き出す諸結論——(1) 一定量の労働は、この同一量の労働によって作りだされる生産物と等価である (2) 一労働日はすべての他の一労働日と等価である——に対して、労働（力）も一つの商品であることを踏まえ、労働によって測られた商品の価値と労働の価値によって測られた商品の価値とを混同していると批判する。さらに、「構成された価値」が諸生産物の比例=釣合によってもたらされるという点について、そのような比例法則は大工業の時代には成り立たない、「トロイアはすでにない！（Fuit Troja!）」と言う。最後にマルクスは、プルードンが主張する労働時間による生産物価値決定の法則がリカードのものであるだけでなく、そこから導かれる労働量を等しく交換するべきであるという平等主義的な立場さえもイギリスの共産主義者ブレイの焼き直しでしかないと指摘する。プルードンは、イギリスに設立された公正労働交換市場の失敗から何も学んでいなかった。

● 構成された価値＝絶対的価値＝総合的価値の定義

プルードン 富というものをこうイメージしてみよう。それはひとつのまとまりをなす大きな化合物のようなものである。[...] 価値とは、こうした個々の要素が全体の一部をなす比例関係（それぞれがそれぞれの尺度）なのである (116)。まさに労働が、そして労働のみが、富のすべての要素を生み出す (120)。価値は法則にしたがうからこそ変動する。この法則は、労働時間という本質的に変動するものを原理とするからである (126)。

マルクス 「諸商品の相対的価値はもっぱらそれらのものの生産に要した労働量にもとづく」ということを原理とするリカードの体系の起源は、1817年にさかのぼる (75)。労働時間による価値の決定は、リカードにとっては交換価値の法則であり、プルードン氏にとっては止揚価値と交換価値とを総合するものなのである (79)。

● プルードンが導出した結論

プルードン セイヤ、かれに追従する経済学者たちによれば、労働はそれ自体が価値をつけられるもので、労働もまたひとつの商品にすぎないから、労働を価値の本源・動因と見なすのは循環論法である。[...] 失礼ながら、こういう経済

学者は恐ろしく考えが浅いことがここで露呈した。労働が価値をつけられるというのは、労働を商品そのものと見てのことではなく、労働のうちに価値が可能性として潜在するという見かたによるものである。つまり、「労働の価値」とは比喩的な表現であり、原因を先に示して結果を表現する言いかたにすぎない (126)。したがって、この人間の一日の労働は5フランの価値があるというのは、この人間の一日の労働の生産物は5フランの価値があるというのにひとしい (127)。

マルクス プルードン氏が引き出す諸結論に、移るとしよう。——一定量の労働は、この同一量の労働によって作りだされる生産物と等価である。——一労働日はすべての他の一労働日と等価である (79)。労働は、それ自体が商品である以上、そのようなものとしては、商品たる労働を生産するために必要な労働時間によって計量される。では、商品たる労働を生産するには、なにが必要なのか? [...] 労働者が生活できて彼の種族をふやすことができるようにしておくために、必要不可欠な物を、生産するだけの労働時間が、まさに必要なのである。労働の自然価格は、賃金の最低限にほかならない (80-81)。〔労働〕時間によって計量される諸生産物のこうした交換が、すべての生産者のあいだに平等主義にもとづく報酬をもたらす、と主張することは、交換に先だって生産物の配分にたいする平等な参加が存在していた、ということ的前提しているのだ (81-82)。

- 富を構成する生産物の比例関係

マルクス もしプルードン氏が生産物の価値を労働時間によって決定されるものとして容認するならば、同様に彼は変動してやまないこの運動をば、そのみが労働〔時間〕を価値の尺度にするところのこの運動をば、容認せねばならぬはずである。構成されてしまっている「比例性関係」というようなものは存在しない。構成しつつある一つの運動〈un mouvement constituant〉が存在するだけである (92)。私的交換がともに天をいただくものは、過去の諸世紀の小工業とその必然的帰結としての「正しい比例」であるか、さもなければ、大工業とその必然的随伴物としてのあらゆる貧困と無政府性でしかない (96)。

- 労働時間による価値規定公式の平等主義的適用

マルクス イギリスにおける経済学の動向にすこしでもつうじている者なら、だれでも、この国の社会主義者たちがほとんどすべて、さまざまな時代にリカード学説の平等主義的適用を提唱したことを、知っているはずである。われわれは、プルードン氏にたいして、ホプキンズの『経済学』(1828年)、ウィリアム・タムソン著『人間の幸福にもっとも寄与する富の分配の諸原理の研究』(1824年)、T・R・エドモンズ著『実践的・道徳的・政治的経済学』(1828年)等々を、いやこれ以外に4ページに及ぶその他の著作を、あげることができるだろう (97)。ところでだ! 等しい労働量の交換は、われわれになにを与えたか? 過剰生産、価値低下、労働過剰、および、それにつづく失業、要するに、われわれが目あたりに見ているような、現在の社会に構成されている経済的諸関係である (104)。

§1.3 価値均衡法則の適用

要約

この節は「貨幣」と「労働の剰余」について論じられている。「貨幣」では、マルクスは、プルードンが金や銀が貨幣になったのは構成された価値ないしは比例性の法則が現実に応用されたためであるという主張が自明であることを踏まえ、貨幣を一つの例外とするのではなく、分業などの経済的諸関係と同様の生産関係の内にあることを指摘する。続く「労働の剰余」でも、プルードンの言う個人の生産に対して結合した個人の生産(=集合力)は剰余を生むという仮説も既にサドラーのような経済学者によって自明とされており、提示される証明も計算間違いや誤解に満ちており、リカードやローダデルの展開する命題にさえ届かないものであるとされている。

1. 貨幣

プルードン 金や銀も、やはりほかの商品と同様、労働を表象する記号である。[...] では、貨幣として用いるのに貴金属がもっぱら好まれるのはいったいどうしてなのか。[...] これまで誰も指摘しなかったことだが、金と銀は、価値が構成されるにいたった最初の商品なのである (134)。貨幣は第一級の商品であり、商業のいかなる波乱にも影響されず、確

たる比率での価値を保持し、それで支払えばかならず受領される。[...] 金と銀の抜きん出た特徴は、その金属的な特性と、その生産のむずかしさと、とりわけ公権力の介入によって、その商品としての価値がかなり昔から固定され、広く信頼されるようになってきていることに由来する (136)。貨幣を変造するのではなく、国王が権力で貨幣の総量を二倍にしても、金や銀の交換価値はやはり全体の比例とバランスによってたちまち半分減る (137)。

マルクス 貨幣は、リカードにとってはもはや労働時間によって決定される一つの価値ではないのであり、それゆえにまた、J.-B. セーは、他の諸価値もまた労働時間によって決定されるものではない、ということのリカードに納得させるための例として貨幣をとりあげたのであったが、J.-B. セーによってもっぱら需要供給によって決定される一つの価値の例としてとりあげられたこの貨幣が、なんと、プルドン氏にとっては、まさに労働時間によって……構成された価値の適用の絶好の例となるのである。[...] 金銀がつねに交換されるのは、金銀が普遍的交換媒介物として役だつという特殊な機能をもっているからであって、金銀が富の総体に比例した分量において存在するからではまったくないのである (115)。

2. 労働の剰余

プルドン 経済学者が一般に認めている公理のひとつに、「労働はかならず剰余を生む」というのがある。この命題こそ、私に言わせれば普遍的で絶対的な真理である。価値の比例性の法則から派生した命題であり、経済科学の全体を要約したものと見ることもできる。[...] この原理こそ、集合としての人間の現実性を証明するひとつの強力な原理なのだ。この原理が個々の人間において真理となるのは、まさしくそれが社会から発生した原理であるからにはほかならない (142)。人間の生活の豊かさは、労働の強度と産業の多様性に直接比例する。したがって、富の増大は労働の増大と相関し、比例する (145)。この原理は、ただ需要と供給を操作して価値の相場取引で儲ける権利をさすものとしか理解されてこなかったのではないか (148)。

マルクス かの、結合しない個人の生産を超過する結合した個人の生産の剰余について、プルドン氏は語る気なのだろうか？ そうだとすれば、われわれは、プルドン氏が身をつつんでいる神秘の衣をいっさいまとわずにこの単純な真理を述べた経済学者を、いくらでも彼に引用してみせることができよう。たとえば、サドラー氏は次のように述べている。「結合労働は、個別労働では絶対に生産しえないような結果をもたらす。[...]」 (117)。同一量の労働をもってより多量の商品を生産させる新発明は、生産物の売買価格〔市場価格〕を低下させる。それゆえ、社会は、より多くの交換価値を獲得することによってではなく、同一の価値をもってより多くの商品を獲得することによって、利潤をうる (121)。プルドン氏は、この命題を彼の希望どおりに証明することができただろうか？ できなかった。しかしこのことは、彼が、経済学者たちはこの証明に失敗している、と非難するのを妨げないのである。彼に反証を示してみせるために、われわれは、リカードとローダデルの二人だけを引用することにしよう。「生産のたやすさをたえず増進することによって、われわれは、それ以前に生産された商品のうち2、3のものものの価値をたえず減少させる。この同じ手段によってわれわれは、国富をますます大きくするばかりでなく、将来のための生産能力を大きくさせるのである [...]」 (122)。

剰余労働と必要労働 資本論第4篇「相対的剰余価値の生産」の部分では、第11章「協業」では言及されないものの、第12章「分業とマニファクチュア」と第13章「機械と大工業」においてひんばんに『哲学の貧困』が引用されている。これは「協業」がプルドン独自のものではなく、先に引用したサドラーなどによって既に指摘されているからであると考えられる。また第14章「絶対的及び相対的剰余価値」の部分では、プルドンが信じる「労働はかならず剰余を生む」という説に対し、剰余労働は決して人間生来の労働ではなく、あくまで資本主義的生産様式、すなわち搾取の論理の上で行われるものであるとする。

§2 経済学の形而上学

§2.1 方法

要約

マルクスは、プルードンの経済学=形而上学的方法〈méthode〉について7つの考察を行なっている。1つ目は、プルードンがヘーゲルの弁証法に依拠しつつも失敗している点、2つ目と3つ目は、物質的生産手段及び生産諸力によって歴史段階的に変化する生産諸関係の把握について、4つ目と5つ目は、プルードンがヘーゲルの弁証法を経済学に適用するにあたり、どのような改変を行っているかについて、6つ目とは、プルードンが発明した社会的天才=精霊〈le génie social〉の空想的な観念の歴史と現実の歴史との間にある矛盾について、7つ目は、経済学と社会主義あるいは共産主義の両者の批判によって、新しい科学を創設したという主張への批判となっている。

● 第一の考察

プルードン われわれの語る歴史は時間の順序ではなく、理念が継起する順序にしたがう。経済のさまざまな局面やカテゴリーは、あるときには同時にあらわれ、あるときには順序が逆になってあらわれる。[...] しかし、経済学のかずかずの理論はそれでもやはり論理的に前後のつながりがあり、全体として知の系列をなす。その順序を発見したことがわれわれの自慢なのである (221)。

マルクス 疑う余地もなくたしかに、プルードン氏は、ヘーゲルまがいの文句をフランス人たちの頭上に投げつけることによって、彼らを怖気づかせようとしたのである (132)。プルードン氏は、諸矛盾^{おじ}の体系の項をきわめるために辛苦に満ちた努力をしたにもかかわらず、単純な定立と単純な反定立という最初の二段階よりも上に登りきれたためしがない。それどころか、彼がこの段階に足をふみ入れたのは、たった二度であって、しかも、二度のうち、一度はあおむけに倒れたのである (133)。

● 第二、三の考察

マルクス 経済学的諸カテゴリーは、社会的生産諸関係の理論的表現、その抽象であるにすぎない。プルードン氏は、真の哲学者として、ものごとをあべこべに解釈し、現実的諸関係をば、「人類の非人格的理性の」胸裡にまどろんでいた[...] あの諸原理、あの諸カテゴリーの託身〈les incarnations〉としか考えないのである (133)。あらゆる社会の生産諸関係は、一つの全体を形成する。[ところが] プルードン氏は、経済的諸関係 [les phases économique] をば、それと同数の社会的諸局面 [les phases sociales] とみなすのであり、そしてこの社会的諸局面は、相互に他を生みだしあうものであって、定立から反定立が生ずると同様に一つのものが他の一つのものから生じ、それらの論理的継起のなかに人類の非人格的理性を実現するのである。[...] 経済学の諸カテゴリーをもって一個の観念体系という建築物を建造することにより、社会組織の諸構成部分が、かつて気ままに分解される (135)。

● 第四、第五の考察

マルクス 彼すなわちプルードン氏にとっては、あらゆる経済的カテゴリーは二つの面、良い面と悪い面をもっている。[...] 解決すべき問題は、悪い面を除去して良い面を保存することである (135)。彼は手あたりしだいにカテゴリーをとりだしてきて、それには、浄化されるべきカテゴリーの諸欠陥を是正する特性がそなわっている、とかつてに決めこむ (137)。

プルドンの反論メモ プルドンは『哲学の貧困』に対して直接の反論は行っていない。『貧困の哲学』の出版者ギョーマンに対しては手紙で「マルクス博士の中傷文、『貧困の哲学』に対する返答である『哲学の貧困』を受け取りました。これは、粗野で、中傷のためのものであり、変造と剽窃の作品です。」と軽蔑しきった調子で書き送っている。とはいえ、彼はその『哲学の貧困』の欄外に反論メモを書いていた。たとえば「君の第五の考察は中傷のための非難である。マルクスの著作の真の意味は、私が到るところで、彼のように考え、それを彼よりも前にいったことを残念がっていることだ」などと書いている。(田中、前掲書、382-383頁参照。)

● 第六の考察

プルドン 社会はまず分業を初源の事実とし、最初の仮説を立てる。分業はまさしくアンチノミーそのものであり、アンチノミーが精神においてもたらすものと同じように、社会経済に二つの相互対立的な結果をもたらす。[...] もとのアンチノミーを解消するために、社会は第二のアンチノミーを登場させる。しかし、第二のアンチノミーのすぐあとに第三のアンチノミーが続く。社会の矛盾をすべて検討しつくすまで[...] 社会という天才 (le génie social) はこうした歩みを続けるだろう。そして、先行するすべての段階へ一挙に舞い戻り、すべての問題をたったひとつの公式でいっぺんに解決する (207-208)。

マルクス プルドン氏の口をとおして語る社会的天才が第一にたてた目的はなにかと言えば、それは、それぞれの経済的カテゴリーのなかにある良いものだけを残しておくために、そのなかにある悪いものを除去することであった。彼にとって、良いもの、至上の善、真の実践的目的とは、平等のことなのである。[...] 要するに平等は、社会的天才が経済的諸矛盾の円内をぐるぐる回りながらたえず目をつけている本源的意志 (l'intention primitive)、神秘的傾向 (la tendance mystique)、神意による目的 (le but providentiel) である。[...] 神意、神意による目的、これらは歴史の進行を説明するために今日もちいられている大言壮語である。実際には、これらのことばはなにものをも説明しない (142)。

● 第七の考察

マルクス 彼は総合 (synthèse) でありたがる。だが、彼は合成された一誤謬である。彼は科学の人として、ブルジョアとプロレタリアの上を^{あま}天がけりたいと思う。しかし彼は、資本と労働とのあいだを、経済学と共産主義とのあいだを、たえずうろつくプチ・ブルジョアであるにすぎない (148-149)。

プルドンとプチ・ブル プルドンの思想はプチ・ブル的だとされてきた。西川長夫はこのような評価にたいして、つぎの二つの点に注意することが必要だと言う。一つは、プルドンが中間階級とよんでいるのは、自分の労働によって生活費を得る点ではプロレタリアと同じだが、その職業からあがる利益と損失の全責任を自分ので負う点でプロレタリアと異なっているような階級、簡単にいえば独立小生産者のことであり、ふつうにいわれるプチ・ブルのイメージとは必ずしも一致しない、ということである。今一つの点は、プルドンの主張はあくまでも人民=プロレタリアの解放にあり、そのよびかけの対象も中間階級であるよりも、人民であったということである (中間階級によびかけるばあも、中間階級の利益という立場からではなくて、人民の解放という立場から、人民との連帯の立場からなされている)。この意味で、プルドンはプロレタリアートの解放を中間階級とフランスの中間階級的伝統をもとにして構想したけれども、プロレタリアの利益から切りはなして中間階級の利益を擁護するとか、現実の歴史のなかでプロレタリアの中間階級化が進行していると主張しているのではない。(坂上孝『フランス社会主義—管理か自立か』、新評論、1981年、233頁。)

§2.2 分業と機械

要約

「分業と機械」の節は、プルードン『貧困の哲学』の第3章、第4章への批判である。それぞれ経済発展段階となっており、分業はその最初の段階にあたる。プルードンは分業によって人間の生活と知性を向上させたが、一方で不平等を生み出したと言う。しかし、この主張自体は経済学では既に自明とされていることを脚色しながら語っているにすぎないとマルクスは批判する。プルードンは、こうした分業による不平等を解消するものとして機械=工場を登場させるのだが、マルクスからすれば、そもそも近代産業の発展において分業が発生したので順序が逆であると指摘する。さらに、プルードンには自動機械工場における分業の性質を持つ革命的側面を捉え切ることができない。結果、プルードンの目指す総合的な労働は、中性の職人、親方職人を範とするようなプチ・ブル的理想に留まってしまふ。

● 分業について

プルードン 分業とは、その本質を考えるならば、人間の生活と知性の平等が実現される様式である。分業はしごとの多様性によって生産物に比例性をもたらし、その交換にバランスをもたらし、その結果として、われわれの富へのルートを開く。[...] したがって分業は、経済発展の第一段階であると同時に、知的進歩の第一段階でもある (162)。しかし、この重要な出発点である分業をいとなみはじめた瞬間から、人類は激しい嵐のなかを進まねばならなくなる。進歩は、最初ごく少数の特権者のみのものである。どこの国でも、こういう連中がエリートとなる (163)。アダム・スミス以後、経済学者はそろって分業の法則の利点と欠点をあげてみせるが、重視されるのはもっぱら利点のほうである。欠点を見るのは、かれらの楽観主義にそぐわない。法則の欠点がどうして生じうるかを問題にした者など、ひとりもない (164)。

マルクス ルモンテーは今日構成されているような分業の憂うべき諸結果を、機知をもって説明した、そしてプルードン氏は、それにつけくわえねばならぬものをなにつ発見しなかった、と。しかし、プルードン氏の過失によって、この、だれが先かという問題に、ひとたび引きいれられてしまったからには、われわれは、ついでに、こうも言うておこう。ルモンテー氏よりもずっと以前に、アダム・ファーガソンの弟子であるアダム・スミスよりも17年まえに、このファーガソンが、とくに分業を論じている一章で、このことをはっきりと説明している (151)。

● 機械について

プルードン 機械は、分業の法則に対抗するものとして、そして分業の法則によって大きく損なわれた均衡を回復させるものとして産業に導入される (206)。機械とはじっさいに何なのか。分業によってバラバラに断片化させられた労働をふたたび集合させる方法だ。[...] 分業のアンチノミーは、すっかり解消するわけではないにせよ、機械によってバランスがとれ、中和されると考えられる (210)。機械は労働者の苦痛を減少させる。まさにそのことによって機械は労働を短縮させ、減少させる。そして、それによって労働は日に日に供給が過剰となり、需要が減っていく。[...] 産業の改善はやすむことなく重ねられ、人間の作業を続けざまに代替させていくから、恒常的な傾向として、しごとの一部はカットされ、したがって労働者たちは生産から排除されていく (222)。機械は分業と同じく、今日の社会経済のシステムにおいては、富の源泉であると同時に、貧困の永遠に宿命的な原因でもある (225)。

マルクス (155–163 頁) プルードン氏にひとこと忠告しておこう。各人にそのもつとも好む特殊作業に専念することを許容するところの、労働のさまざまな部分の分離、プルードン氏が世界のはじめとともに始まったとみなすところの分離は、競争の支配する制度のもとにある近代産業において、はじめて存在するのである (155)。近代社会の内部における分業を特色づけるものは、分業が、各種の専門、各種の特殊専門人、および、それらとともに職業白痴を生み出すという事実である (162)。[...] 自動機械工場における分業を特色づけるものは、そこでは労働が特殊的な性格をすべて失っている、ということである。しかし、すべての特殊的な発展が停止するとき、いちはやく、普遍性の欲求が、個人の全般的発展をめざす傾向〔努力〕が、感じとられはじめる。自動機械工場は特殊専門人と職業白痴を一掃するのである。プルードン氏は、自動機械工場のこの唯一の革命的側面を理解することさえできなかったので、一步後退する。[...] 要するにプルードン氏は、小ブルジョアの理想をこえて進むことができなかった。そして、この理想を実現させるために彼の思いつく最良のことは、われわれを中世の職人かせいぜい親方職人にひきもどすことである (163)。

プルドンと交換様式 D プルドンの本の「機械」の章では、自由についての脱線が繰り返されている。「経済への機械の導入は自由にむかっての跳躍となる (214)。自由とは行動する能力であり、行動しない能力である (216)。」柄谷行人は、このプルドンの自由の思想、相互性の思想を交換様式 D と関連づけている。「私の考えでは、プルドンに先立って、宗教を批判しつつ、なお且つ宗教の倫理的核心すなわち交換様式 D を救出する課題を追求した思想家がいる。カントである。彼は、「他者を手段としてのみならず同時に目的として扱え」という格率を普遍的な道徳法則であると考えた。[...] 他者を「目的として扱う」とは、他者を自由な存在として扱うということであり、それは他者の尊厳、すなわち、代替しえない単独性を認めることである。自分が自由な存在であることが、他者を手段にしてしまうことであってはならない。すなわち、カントが普遍的な道徳法則として見出したのは、まさに自由の相互性(互酬性)なのである。それこそ交換様式 D である。」(柄谷行人『世界史の構造』、岩波書店、2010年、345頁。)

§2.3 競争と独占

要約

この節ではプルドン『貧困の哲学』第5、6章、「第三段階—競争」、「第四段階—独占」を取り上げている。競争は労働にとって本質的なものであり、自由を生み出すものである。しかし、同時にその暴力的な側面は常に人々を危機に晒す。そのため、競争の均衡、つまりは取締りを発見することが問題となる。これに対しマルクスは、競争の確立の歴史性といったものをプルドンが全く考慮していないことを批判する。さらに、競争から発展した独占も、本来封建的独占から生じたものであって、順序が逆転している。したがって、封建的独占の否定こそが近代的、ブルジョア的独占となるはずだが、プルドンはそうした区別を設けていない。

● 競争について

プルドン (267–309 頁) 競争は競争によって減じる (266)。そもそも競争は、分業と同じくらい労働にとって必要不可欠なものだ (267)。競争は、価値の構成に必要である。分配の原理そのものにとって必要であり、したがって平等の実現のために必要である。[...] 賃金の保証は、価値についての正しい理解がなければ不可能だ。そして、この価値は競争によってのみ発見される (270)。共産主義も、半ば社会主義的な民主主義も、競争の原理にかんしては中庸の立場である。つまり、われしらずのうちに反革命的な思想となる (274)。競争は、その原理の有用性そのものから悪を生じさせ、そして、まさにその悪からあらたに善を引き出すのである。有用性は破壊から生まれ、均衡は動乱によって作りだされる (286)。競争はその有用な側面を普遍化し、そして最高度に強めなければならない。しかし、その否定的な側面は、あとかたも残さぬよう徹底的に消去しなければならない (299)。競争をなくすことはここでの問題とはなりえない。それは自由をなくすことと同様に不可能なのだ。ここで重要なのは均衡を見出すことである。私なりにあえて言うなら、取り締まることである。なぜなら、個人のものであれ集団のものであれ、あらゆる力、あらゆる自発性はそれなりに限定されなければならない (309)。

マルクス 競争からのがれるためにはいくつかの法令を公布するだけで十分だ、と考えてみたところで、けっしてわれわれは競争からのがれることはできない。賃金をそのままにしておいて、競争の廃止を提議するということにまで仮定をおしすすめるならば、われわれは勅令によってばかげた行為をすることを提議するにすぎないであろう。しかし、国民は勅令に従って事をはこぶものではない。上述の法令を制定するまえに、彼らはすくなくとも、彼らの産業的・政治的存立条件を、したがってまた彼らの全存在様式を、根底から徹底的に変革してしまっていなければならない (165)。

創造的破壊 プルードン『貧困の哲学』のエピグラフには「私は破壊する、そして建設する (Destruam et Aedificabo)」という一節が掲げられている。齊藤訳の解題では、「該当する箇所はない」とされている。このことばはバクーニンの「破壊の情熱は創造的意味な情熱である」と同じようにアナキストの間で好まれたものだが、齊藤によれば、プルードンの主張の力点は破壊ではなく、創造であるとし、シュンペーターの言う「創造的破壊」に近い。なお、『申命記』第32章第39節に「わたしは殺し、そして生かす。(Ego occidam et ego vivere faciam; percutiam et ego sanabo)」という一節は存在する。プルードンの伝記を書いたピエール・ハウプトマンは、『コレヒトの言葉』第3章第3節の「破壊するとき、建てる時」(tempus destruendi, et tempus aedificandi) がもっとも近いだろうと推測している。(Pierre Hauptmann, *Pierre-Joseph Proudhon: sa vie et sa pensee 1809-1849*, Beauchesne, 1982, p.642.)

- 独占について

プルードン じっさい、独占は競争の果てにかならず生ずる。競争はたえざる自己否定によって独占を生み出す。独占のこうした出自をみれば、すでにそれだけで独占は正当なものと言える。なぜなら、生命体には運動が不可欠であるのと同様に、社会には競争が不可欠であり、そして独占は競争の目的・終点としてそのあとに続くものだからである (327)。経済の面で、独占は富の増進に貢献する (341)。地代は独占からではなく、所有から発生するものなのだ (345)。独占も競争と同じく、ことばにおいて、そして定義において矛盾がある (350)。[...] 独占者は賃金生活者を破産においこむ。独占者が労働者のものを横領して生きていることは、動かしがたい真実なのである (351)。独占は、一種の保存本能によって協同^{アソシアシオン}の観念まで墮落させてしまった (366)。合資会社はほかのすべての産業から自分の固有の分野を排他的に守る。限定しないのであれば、合資会社は根本的に変質する。まったくあたらしいべつの形態の会社になる。その会社はもはや特別に利益の追求を旨とせず、労働の配分と交換の諸条件をコントロールするようなものとなる。それはまさしく[...] 独占の法学が排除しようとする協同^{アソシアシオン}にほかならない (371)。

マルクス プルードン氏は、競争によって発生した近代的独占についてだけ語るのである。しかし、われわれがみな知っているように、競争は封建的独占から生じたのである。だから、本来、競争が独占の反対物であったのであって、独占が競争の反対物であったのではない (169)。実際生活においては、競争、独占、およびそれらの敵対関係が見いだされるばかりでなく、さらに公式ではなくて運動であるところの、それらの総合も、また見いだされる。独占が競争を生みだし、競争が独占を生み出す。[...] 独占者たちが部分的な〔経営者〕連合によって彼ら相互のあいだの競争を制限すれば、競争は労働者たちのうちで増進する。だが、一国の独占者たちに対抗してプロレタリアの集団が増大すればするほど、諸国の独占者たちのあいだの競争が、ますます制御しがたいものになる。[...] すなわち、独占は競争という闘争を経過することによってのみ維持されうるのである (170)。

§2.4 土地所有または地代

要約

この節は、プルードン『貧困の哲学』の第11章「第八段階——所有」に対する批判である。マルクスはプルードンが所有一般について論じていない上、地代の起源を所有の起源同様経済外的なものであるとみなしていると、これはプルードンが地代と所有の経済的起源を理解する能力がないことの表れだとする。次に、プルードンによるリカードの地代理論の援用についても、土地所有を解明するために所有者を介入させ、地代を解明するために地代取得者を介入させると批判し、所有や地代を経済学的に解明していないと批判する。マルクスは、土地所有者を農業資本家に対立させ、農業資本家を農業労働者に対立させる競争の関係を提示する。

- 土地所有または地代

ブルードン ひとは所有によって、自分の領分を決定的にわがものとし、自分がその土地の主人であることを宣言する (297)。経済の問題はすべて所有においてあらわれると言える。こういう問題は、われわれをたじろがせるほど数が多く、根が深く、難しく、それぞれ微妙な差異があるのだが、これにたいして社会はたったの一言、地代 (la rente) という言葉で答える (311)。地代は、制度の出発点においては所有にたいする謝礼である。所有というあたらしい権利を得て土地の管理を託された所有者に支払われる報酬である (313)。地代生活者 (le rentier) は、構成途上の社会において社会の経済を守護する者であり、地代によって形成された資本を管理する者にほかならない (314)。地代は所有にたいする謝礼であるとしても、耕作にたいしては不当な徴収である。労働をしない者に報酬を与えるのは、生産・分配・交換にかんする社会経済学のあらゆる原理に反する。地代の起源は、所有の起源と同様、いわば経済の外部に属する (317)。

マルクス ブルードン氏は所有一般について語っているようにみえるが、じつは土地所有だけを、地代だけを論じているにすぎない。[...] ブルードン氏は、自分が地代と所有との経済的起源を理解する能力のないことを、みずから告白している (172)。

● 地代論—リカードの解釈をめぐって

ブルードン 小作人 (le fermier) はいったい何を所有者 (le propriétaire) に負っているのだろう。地代の割り前はいったいどうでなければならないのか。[...] リカードの理論がこの問いに答える (318)。同じ量の用役で田畑がより多くの果実をもたらせば、その田畑はより高く評価される。したがって、小作人の賃金、すなわち生産の費用を差し引いて、土地の生産物の総体をつねにわがものにしようとするのが所有者たちの傾向となった。じっさい、所有は労働のあとであらわれ、生産物において現実の費用を上回る部分のすべてを労働から取り上げる。所有者は神秘的な義務を果たし、小作人にたいして共同体を代表するが、神の摂理の予想では小作人こそが責任ある労働者にほかならないのである (318)。信用という大きな段階のあと、人間をふたたび土地に結びつけることが必要になった。そこで社会という精霊 (le génie social) は所有を制度化する。そのあとでは、巨大な土地台帳をつくるが必要になった。すると、それを集合的な作業として鳴り物入りでおこなうのではなく、個々人が利害を相争う形にし、小作人 (le colon) と地代生活者 (le rentier) の争いから、社会にとってもっとも公平な調停を引き出す (320)。

マルクス まず第一に、この騒々しい文句のすべては、次のことに帰着する。そのことをリカードはこう言った、農産物の価格が資本の通常の利潤と利子とをふくめたその生産費を超過する部分は、地代にたいして度量基準を与える、と。ブルードン氏はもっと巧みな言い方をする。彼は、デウス・エクス・マーキナとして地主を介入させるのである。そしてこの急場の救いの神様が、生産費を超過するその生産物部分をすべてコロシ¹⁰から奪いさるのである。彼は、所有 (la propriété) を説明するために地主 (le propriétaire) を介入させる手を使い、地代 (la rente) を説明するためには地代取得者 (le rentier) を介入させる手を使う。[...] 地代は、リカードの意見では、そのブルジョア的姿態における土地所有である。すなわち、ブルジョアの生産の諸条件に従属した封建的所有である (174-175)。地代とは、リカードの見解では、商業的企業〔企業的農業〕に転化された家父長制的農業であり、土地に投下された産業資本であり、田舎に移植された都市のブルジョアジーである。地代は、人間を自然に結びつけることをせず、ただ土地の耕作を競争に結びつけただけである。ひとたび地代として構成されるや、土地所有それ自体が競争の結果となる (177)。豊度の等しくない諸土地の諸生産物が等しい価格で得られることから地代は生ずる (178)。

● 資本の利子としての地代

マルクス 資本としての土地の代表者は、地主ではなくて借地農である。土地が資本としてもたらす収入は、利子と産業利潤であって、地代ではない。このような、利子と利潤とをもたらすが、地代は全然もたらさない土地もいくらかは存在する。要するに、土地は、利子をもたらさざりにおいて、資本としての土地〔土地資本〕なのであり、しかもそれ

¹⁰ 「この箇所および以下に使われている「小作人」(Zinsbauer)、「コロシ」(Kolone) の概念は、マルクスがこの書物のフランス語初版で用い、またブルードンが彼の著作で一貫して用いた「コロシ」(colon) (半小作人) ということばにあたる。[...] コロシとは、収穫を地主と分け合う耕作者であって、現地で地主に支払う小作人をいう。元来、ローマの農奴であるコロヌス (colonus) から出たことばであり、ローマ帝政末期から中世までは土地に緊縛された非自由な者を指したが、8-9世紀には農奴よりはすこしましな、たとえば、修道院領に属する非自由な農民を指すことになった。ブルードンのコロシの用法は明確ではないが、地主と収穫を分けあう分益農、すなわちメテイエ (métayer) の意味に用いているようである。」(『マルクス=エンゲルス全集第4巻』、643頁)。

は、資本としての土地〔土地資本〕としては、地代をもたらさない。土地は土地所有を構成しないのである。[...] 地代は社会から生ずるものであって、土壤から生ずるものではない (182)。

資本論における地代論 マルクスの地代論は『資本論』第三部第六篇「超過利潤の地代への転形」において、最もまとまった形で論じられている。マルクスは、土地物質〈terre-matière〉と土地資本〈terre-capital〉を区別することについて、『哲学の貧困』を参考文献に掲げている（カール・マルクス『資本論 第3 第2分冊』、大内兵衛・細川嘉六監訳、大月書店、1968年、800-801頁。）。また、『資本論』における地代論の課題は、資本制生産様式における土地所有の形態の解明であるため、「土地所有を体系的に論及することはわれわれの計画の範囲外のことである（同上、799頁。）」としている。

§2.5 ストライキと労働者の団結

要約

マルクス『哲学の貧困』の最終節は、ストライキに対する立場の違いが出発点となる。プルドンは、労働者の団結は賃金の引き上げをもたらすが、賃金の引き上げは物価全般の高騰につながるため、ストライキを禁止する。しかし、「物価全般」というのはありえないとマルクスは反論する。マルクスはストライキによる一時的な団結の結果、恒久的団結（＝労働組合）がイギリスで誕生し、現在では全国労働組合連合協会にまで発展しているという事実を踏まえ、政治闘争のための団結を標榜する。

● ストライキについての両立場

プルドン 私は労働者階級の境遇改善を心から願う者であるが、これだけははっきり言いたい。ストライキによって賃金が上昇すれば、それが物価全般の高騰につながることは絶対にありえない。[...] そういうやりかたで賃上げしても、労働者はけっして富を手に入れることができないし、富よりはるかに大切な自由も手に入れることができない (181)。リーヴ・ド・ジエの争議で、炭鉱の経営者にたいして、われわれが社会の真の代表者と見なすべき炭鉱夫は、自分の賃金を守りながら独占者による値上げに抵抗しようとした。団結にたいして団結で対抗しようとした。ところが権力は炭鉱夫を銃殺した。[...] ここで注目すべき天は、殺されたり重症を負わされたひとの数ではない、注目すべきは、労働者が抑圧されたという点である。[...] しかし、労働者が団結して独占を脅かそうと企てること、それは社会が許さない。独占が圧殺されれば、競争がなくなり、工場が解体され、さらに、社会のいたるところであらゆるつながりが解体されていく (438-439)。

マルクス 利潤と賃金の騰落は、資本家と労働者とが一労働日の生産物の分配にあずかる割合を表わすにすぎないのであって、ほとんどの場合、生産物の価格には影響を与えない (184)。イギリスでは、当面のストライキのみを目的とし、そしてそのストライキとともに消滅する部分的団結だけに、とどまらなかった。労働者と企業家との闘争において労働者たちの城砦として役だつ恒久的団結が、労働組合 (trade-unions) が結成された。そして現在ではそれらの地方的労働組合のすべては全国労働組合連合協会 (National Association of United Trades) に一つの結集点を見だし、そして協会の中央委員会はロンドンにあり、協会所属数はすでに8万に達している。[...] 相互に結集するための労働者たちの最初の試みは、つねに、団結という形でおこなわれる (188)。被抑圧階級は、諸階級の敵対関係を基礎とするすべての社会の、死活を制する不可欠な条件である。だから、被抑圧階級の解放ということは、必然的に、あらたな社会の創造ということをふくんでいる。[...] あらゆる生産用具のうちで、最大の生産力は、革命的階級そのものである (189)。労働者階級の解放の条件、それは、あらゆる階級の廃止である、ちょうど、第三身分の、ブルジョア階層の解放の条件があらゆる身分とあらゆる階層との廃止であったのと同様に。[...] 諸階級と階級対立がもはや存在しない事態においてのみ社会的進化は政治的革命であることをやめるであろう。そのときまでは、つまり、社会のあらゆる全般の変革の前夜にあっては、社会科学

の最後のことは、つねに、次の一句に尽きるであろう、——「戦いか、死か、血まみれの戦いか、無か。問題は厳として、こう提起されている。¹¹」

社会変革への危険視 国家とか、資本とか、教会といった「公認の社会 (la société officielle)」のあり方が、この「真実の社会」が認識され、自己を普遍化することを妨げているのであって、革命家の任務は、それらの阻害要因を取り除き「真実の社会」をより可視的なものにしていくことにあると見なされる。言い換えれば、現に存在している社会的諸形態のなかから、まだしも理想的な社会関係に近いもの（たとえば相互扶助組合や相互信用組合など）を取り出し、その自生的な成長を妨げている要因をできるだけ除去していくという思考方法をとる。したがって、プルードンは、社会にとって外在的な何らかの普遍的原理を導入して社会を変革していくという発想に対してはきわめて懐疑的となる。彼がユートピア主義に対してだけでなく、労働者生産協同組合的なアソシアション論に対してさえ警戒的なのは、そのあたりにも帰因する（谷川稔『フランス社会運動史——アソシアションとサンディカリズム』、山川出版社、1983年、163頁参照。）。

参考文献

- ピエール・アンサール『プルードンの社会学』、齊藤悦則訳、法政大学出版、1981年。
- 柄谷行人『世界史の構造』、岩波書店、2010年。
- 河野健二編『プルードン研究』、岩波書店、1974年。
- 河野健二『もうひとつの社会主義』、世界書院、1987年。
- 木村周市朗「近代原理の形式性とドイツ国家学の実質性」、『成城大学経済研究』、成城大学、2010年。
- 田中菊次『マルクス経済学の学問的達成と未成』、創風社、1989年。
- 谷川稔『フランス社会運動史』、山川出版社、1983年。
- ジャン・バンカール『プルードン 多元主義と自主管理 I』、藤田勝次郎訳、未来社、1982年。
- ジャン・バンカール『プルードン 多元主義と自主管理 II』、藤田勝次郎訳、未来社、1984年。
- 津島陽子『マルクスとプルードン』、青木書店、1979年。
- 藤田勝次郎『プルードンと現代』、世界書院、1993年。
- サント・ブーヴ『プルードン』、原幸雄訳、現代思潮社、1970年。
- ピエール＝ジョセフ・プルードン『貧困の哲学 上・下』、齊藤悦則訳、平凡社、2014年。
- シャルル・ボードレール『ボードレール全集 VI』、阿部良雄訳、筑摩書房、1993年。
- マルクス＝エンゲルス『マルクス＝エンゲルス全集 第4巻』、大内兵衛・細川嘉六監訳、大月書店、1960年。
- マルクス＝エンゲルス『資本論 第3巻 第2分冊』、大内兵衛・細川嘉六監訳、大月書店、1968年。
- マルクス＝エンゲルス『資本論書簡 第1巻』、岡崎次郎訳、大月書店、1999年。
- マルクス＝エンゲルス『資本論書簡 第2巻』、岡崎次郎訳、大月書店、1999年。
- マルクスカテゴリー事典編集委員会編『マルクス・カテゴリー事典』、青木書店、1998年。
- 森川喜美雄『プルードンとマルクス』、未来社、1979年。
- 山本雄一郎『史的唯物論と経済的カテゴリー論』、神戸商科大学経済研究所、1992年。

Georges Gurvitch, *Proudhon. Sa vie, son œuvre, avec un exposé de sa philosophie*, PUF, 1965.

Pierre Hautmann, *Pierre-Joseph Proudhon: sa vie et sa pensée 1809-1849*, Beauchesne, 1982.

¹¹ ジョルジュ・サンドの歴史小説『ジャン・ジースカ』の書き出しからとったもの。